



Title	Vol.5 No.1
Author(s)	核兵器廃絶研究センター(RECNA)
Citation	RECNAニューズレター, 5(1), pp.1-4; 2016
Issue Date	2016-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/36600
Right	© 長崎大学核兵器廃絶研究センター

This document is downloaded at: 2019-02-23T11:04:56Z

国連公開作業部会(OEWG)

中村 桂子

2016年5月2日～13日、核軍縮に関する「国連公開作業部会(Open-Ended Working Group)」第2会期がジュネーブ国連欧州本部で開催された。これは、メキシコ等の提出した決議案(「多国間核軍縮交渉を前進させる」※)が138カ国の賛成多数をもって採択されたことを受け、昨年の第70回国連総会が設置を決定したものである。今年2月、5月、8月に計15日間にわたって、「核兵器のない世界の達成と維持のために締結が求められる具体的かつ効果的な法的措置、法的条項及び規範」に関する「実質的な協議」を行い、成果を秋の国連総会に「勧告」として提出する任務を負っている。作業部会にはすべての国連加盟国が参加可能であり、核不拡散条約(NPT)再検討会議など、他の核軍縮を扱う国際会議と比べて市民社会・NGOの関与の幅が大きいことが特徴だ。

作業部会開催の背景には、2010年以降の「人道アプローチ」の潮流がある。核兵器使用のもたらす壊滅的被害、テロや偶発的使用のリスクに対する認識を背景に、核兵器禁止の法的枠組みを求める声が非核兵器国の間に高まった。三度にわたる「核兵器の人道上の影響に関する国際会議」はこうした議論に大きく貢献した。他方、非核兵器国の勢いに反して、法的議論を嫌悪する核兵器国とその同盟国もまた抵抗を強めていった。

5月の作業部会において、両者の溝はさらに深まったといえる。核保有国の姿はなかったが、その代弁をするかのごとくNATO加盟国、日本、オーストラリアなどの「核抑止依存」非核兵器国が禁止条約に反対する論陣を張った。

「人道面は重要だが、安全保障の面を忘れるな」「核保有国が参加しない議論に意味はない」——こうした主張を繰り返す「核抑止依存」国に対し、「禁止条約」推進派の非核兵器国は「現状を変えるべき」と声高に訴えた。事実、後者は明らかに国際社会の多数派であった。オーストラリアなど126カ国は「禁止条約の追求」を求める作業文書を共同提出した。



会場内の様子

2016年5月2日、パレ・デ・ナシオン、ジュネーブ、撮影RECNA

「禁止先行」型の核兵器禁止条約に支持も高まった。これは核兵器の保有、使用などを先行する禁止条約を作り、国際社会に核兵器禁止の規範意識の確立を目指すものである。廃棄や検証プロセスを含む包括的な禁止条約と異なり、条約交渉に核保有国の参加を必ずしも必要としていない。メキシコら10カ国は、「非核兵器地帯」国家として、2017年にも核兵器禁止条約の交渉会議を開くことを提唱している。

8月の第3会期(5、16～19日)で採択される「勧告」に禁止条約交渉が盛り込まれるか否かが当面の焦点となる。この結果は、秋の国連総会とその先に向け、「禁止条約」推進派の国々の動きに大きく影響していくであろう。条約交渉開始が現実的なアジェンダとなりつつある中で、「核抑止依存」非核兵器国の抱えるジレンマはますます深くなっている。今問われているのは非核兵器国の「本気度」だと言えるだろう。日本も蚊帳の外におかれてはいけない。核兵器禁止に向けた国際議論はまさに正念場を迎えている。

※RECNA公式HPの「市民データベース」に全訳掲載。

(なかむら けいこ、准教授)

2017年5月27日(金)は歴史的な一日となった。オバマ米大統領が現職大統領として初めて被爆地である広島を訪れたのである。資料館への見学に始まり、17分余にわたるスピーチ、そして被爆者代表との原爆ドームの見学で締めくくった式典は、まさに歴史に残る貴重な一日であった。その熱い一日を終えた今、改めて今回の訪問の意義と今後の課題を考えてみたい。

訪問自体の意義

何よりも、現職の米大統領が被爆地を訪れ、直接「被爆の実相」を実感されたこと自体、大きな意義をもつ。その体験は、「核兵器は決して使えない兵器であること」との確信につながるはずであり、それが政策に影響を与えていくことを信じたい。また、その体験と確信は、おそらく次の米大統領、そして他の核保有国のリーダーに引き継がれ、核保有国のリーダーが被爆地を訪れることが慣例になることも夢ではない。そうなれば、「核抑止」そのものが安全保障にとって価値のないもの、という考え方が世界の常識になっていくはずであり、今回の訪問はまさに「(核兵器についての)価値観の転換点」につながると期待される。

演説の評価

当初の予想以上に長い17分にも上る演説は、オバマ大統領らしく、スケールの大きな、そして抒情的で聴衆の心に訴えるものであった。その特徴として次の3点を特記しておきたい。

第1に「戦争の根絶」を強く訴えた点である。戦争を根絶させること、紛争には軍事力でなく外交で解決すべきであること、を強調した点は平和憲法を持つ日本にとっても意義のあるメッセージであった。第2に、「科学技術の二面性」に言及した点である。科学技術の進歩に伴い、今後は「道義的革命を必要とする」としたメッセージも人類共通の課題として記憶されるだろう。第3のポイントとして広島・長崎を「核戦争の夜明け

ではなく、私たちの道義的な目覚めの地として」明記した点である。核兵器廃絶に向けての道義的責任を人類として考えよう、という呼びかけは、ラッセルアインシュタイン宣言にも通じる、普遍的なメッセージであった。

しかし、どうしても書かなければいけないのは、核兵器廃絶に向けての「具体的政策提言」が欠けていた点である。大統領任期の締めくくりとして、期待された「核廃絶への新たな一歩」という提言がなされなかったことは、残された課題として明記されなければならない。

「謝罪」「正当化」を巡る議論

今回の訪問をめぐる、原爆投下について「謝罪すべきか否か」、あるいは「原爆投下は正当化されるか否か」の議論が再び日米の間で巻き起こった。この課題は、究極的には、「抑止論」の是非や「武力か外交か」といった議論にもつながる。原爆投下という悲惨な結果から歴史として何を学ぶかが問われているのであり、二度と核兵器が使われることのないよう、この議論も終結していくことが望まれる。

日米両国の「道義的責任」

最後に、今回の訪問を、単なる「日米同盟の強化」という狭い枠組みで評価を終わらせてはならない。日米両国は、世界で唯一、「核兵器を使った国」と「被爆した国」という極めて特異な国なのである。したがって、「核兵器のない世界」を目指し、確固たる信念をもって世界を主導していく「道義的責任」を果たすことが求められており、それこそが被爆者の切なる願いでもある。そして、今後の両政府の取り組みに注目し、常に監視と提言を続けていくことが私たちの責任でもある。

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

5月28日に、長崎を訪問中のマレーシアの元首相であるマハティール・ビン・モハド博士と若い世代との平和をめぐる対話集会が開催された。マハティール博士は、1981年から2003年まで20年以上にわたってマレーシアの首相を務め、その間に西欧よりもアジア、特に日本に発展のモデルを求めようという「ルック・イースト政策」を提唱したことで知られている。

マハティール博士は、首相引退後も国際的な次世代の育成事業や平和活動に熱心に取り組んでおり、今回の対話集会も「被爆地ナガサキから核兵器廃絶へ向けて活動している若い世代と話したい」というマハティール博士の希望で実現したものである。当日は長崎を中心に、40名を超える大学生、高校生が会場に集まり、マハティール博士の講演に熱心に聞き入り、また質疑応答では、活発なやり取りが展開された。



若者に語りかけるマハティール博士
2016年5月28日、長崎、撮影RECNA

マハティール博士は、「国家間の対立を、絶対に武力により解決しようとしてはならない」という点を繰り返し強調し、

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

マレーシアが近隣諸国との間で抱えてきた領土問題を交渉と国際裁判を通して平和的に解決してきた経緯に言及した。そして、その観点から、マハティール博士は日本の憲法第9条と戦後の平和主義の系譜を高く評価すると同時に、現在の日本の安全保障及び外交政策に対しては、若干の疑問を呈した。マハティール博士は、かつて自分が心から尊敬し、自国の発展のモデルとしていた日本が、少しずつその針路を変えつつあるのではないかと懸念を示し、日本の若い世代が、日本が戦後継続してきた平和主義を堅持してくれることに期待を寄せ、対話集会に参加した学生、生徒達を激励した。

ナガサキ・ユース代表団

ナガサキ・ユース代表団4期生が決定

前号に続き、第4期ナガサキ・ユース代表団をご紹介します。

●小泉 容 グレイス (NGOスタッフ)

日本人とアメリカ人との間でできたハーフです。アメリカと日本を行ったり来たりして育ちました。小学校までの平和教育は長崎で受け、とてもバイアスを生み出す教育であったため、アメリカ人としていじめを受けてきました。人に憎まれる、非難されることが怖く、高校2年生まで核問題や平和活動をなるべく避けていました。RECNAに参加し始めたのは日本の歴史の一部だけでなく、世界の歴史・現状を学び、未来を変えていくために人が集まり、考える場であると知ったからです。

この2年間、RECNAサポーターとして活動し、ユース代表団2期生・3期生のボランティアメンバーとしてNPT会議へも同行させて頂きました。おかげさまで、核問題をはじめ、「平和活動」の色々な分野に触れ、学ぶことができました。国境を越え、様々な国の人々とふれあうことができ、核問題を通して、国際社会の多面的にわたる問題についてますます知識を得ることができました。より多くの若者達と、個人の経験や意見を共有し、お互いの言語、文化、歴史から学び合い、活かしていきたいと思っています。

●佐々木 朋哉 (長崎大学 工学部 4年)

僕は今回のプログラムが、「自分たちがどこに行き、何をするかを計画し、実際に実行して、どうだったかを検証して、来年以降のユースにつなげることができる」ということで、これまで以上に自由度が高いという部分に魅力を感じて参加することを決意しました。

僕がユース3期生で感じたことは「世界における日本の立場」です。核問題を含めたさまざまな問題での日本の立場をさらに深く理解したいと思うと同時に、アジアという地域における日本の立場そして役割について実際に足を運びながら、色々な人から話を聞きたいという思いが強くなりました。

今回のテーマは、「アジアにおける日本」です。現在アジアが抱えている様々な問題やアジアの未来について考えていきます。そのための一つの柱としてRECNAの研究テーマである「北東アジア非核兵器地帯」を中心として学びます。今回の経験を通してアジアの将来と日本の役割、そして自分がそこで何ができるのかが見えるように行動していきます。

●白波 宏野 (長崎大学 多文化社会学部 2年)

戦後70年を迎え長崎でも被爆者の平均年齢が80歳を超えるなど、時代が進むにつれ戦争や核兵器への記憶、恐れが日本からも被爆地ナガサキからも着実に薄れていっています。一方でこの世界には今も15,700発もの核兵器が存在し、今日も世界のどこかで争いが起こり核兵器への脅威は高まるばかりです。世界がこのような状況にある今、若者の役割、力はとても大きな意味を持つと思います。世界から核兵器の脅威を無くすために私たち若者や学生が出来ることはとても小さなものかもしれませんが、被爆地ナガサキの若者であるからこそ出来ること、私たちにしかできないことは沢山あると思います。私もナガサキの若者の一員として、ナガサキ・ユース代表団での活動を通して、いろいろな人と出会いいろいろな事を学び、考え、発信していきたいです。ナガサキの若者の代表として誇りを持って自分らしく！頑張ります！！

RECNAの活動

2016年4月1日～2016年6月30日

- | | |
|---|--|
| 3月25日(金)～4月10日(日) ■モンゴル・中国・韓国にて専門家と意見交換
(ユース代表団4期生 NEA) | 5月13日(金) ■オバマ大統領広島訪問に向けてRECNA見解発表 |
| 3月29日(火)～4月2日(土) ■RECNA-NEAS WG3欧州(ドイツ・デュッセルドルフ、オーストリア・ウィーン)に出張
(広瀬副センター長、全教授) | 5月25日(水)～5月26日(木) ■韓国・済州島にて“The 6th Asia Pacific Leadership Network Annual Meeting”に参加
(鈴木センター長) |
| 3月29日(火)～4月2日(土) ■アメリカ・ワシントンにて“Nuclear Security Summit”に参加
(鈴木センター長) | 5月27日(金) ■オバマ大統領広島訪問時ユース代表団3期生派遣 |
| 4月1日(金)～4月10日(日) ■中国・韓国にて学生と意見交換
(ユース代表団4期生 Peace Caravan) | 5月28日(土) ■「マハティール元首相と語る：核のない、平和な未来にむけた若者の役割」
講師：マハティール・ビン・モハマド元マレーシア首相 |
| 4月4日(月)～4月6日(水) ■ナガサキ・ユース代表団4期生 Peace Caravanチームの活動に同行のため上海に出張
(鈴木センター長) | 6月4日(土) ■平成28年度第1回核兵器廃絶市民講座
第1回「北東アジア非核化に向けて：『ナガサキ・プロセス』の構築」
- 講師：鈴木センター長
- 場所：国立長崎原爆死没者追悼祈念館 |
| 4月9日(土) ■青山学院大学にて日本軍縮学会2016年度研究大会に参加
(広瀬副センター長・中村准教授) | 6月13日(月) ■『世界の核弾頭データポスター』および『世界の核物質データポスター』の完成記者会見 |
| 4月13日(水)～4月14日(木) ■科研費プロジェクト調査：ソウル(鈴木センター長、全教授) | 6月23日(木) ■長崎県立長崎東高校スーパーグローバルハイスクール講演会
「長崎からグローバルな課題を発見する」
(広瀬副センター長) |
| 4月29日(金)～5月15日(日) ■国連公開作業部会(OEWG)(ジュネーブ)モニター
(中村准教授) | 6月24日(金) ■長崎市立戸町中学校平和学習グループRECNA訪問 |
| 5月10日(火) ■長崎県立長崎東高校スーパーグローバルハイスクール意見交換会
(広瀬副センター長) | 6月25日(土) ■長崎大学教育学部附属小学校校友会RECNA訪問 |

お知らせ

平成28年度核兵器廃絶市民講座

「核兵器のない世界をめざして」

第2回 「世界の核兵器の現状と近代化計画」
講師： 富塚 明 RECNA准教授(兼務)
日時： 2016年7月9日(土) 13:30～15:30
場所： アルカス佐世保 大会議室A

第3回 「核兵器廃絶に向けて：非核兵器国の役割」
講師： 中村桂子 RECNA准教授
日時： 2016年9月10日(土) 13:30～15:30
場所： 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※いずれも受講料は無料、参加申し込みの必要はありません。

RECNA叢書刊行開始

RECNAでは核軍縮に関するシリーズ「RECNA叢書」の刊行を開始しました。その第1号として、ウォード・ウィルソン著『核兵器をめぐる5つの神話』を5月に法律文化社より刊行しました。著者のウィルソン氏は2013年の第5回地球市民集会ナガサキにも参加した核問題の専門家、「原爆が日本を降伏させた」、「核兵器は戦争を抑止する」等の通説は歴史的な事実と符合しない「神話」だとして再検討する必要性を訴えています。日本語版は黒澤満RECNA顧問が監修し、広瀬副センター長、中村准教授、富塚准教授が翻訳を担当しています。定価は¥2,500(税別)です。お近くの書店等でお求めください。



世界の核弾頭・核物質データポスター

2016年版「世界の核弾頭データポスター」および「世界の核物質データポスター」が完成しました。日本語版はA1版とA2版があります。英語版とハングル版はPDFのみです。

いずれも<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/database/nuclear>からダウンロードすることができます。また日本語版のポスターをご希望の方は、RECNAまでお問い合わせください。



※ニューズレターを電子版でお受け取り御希望の方は、下記メールアドレスへ御一報くださいますようお願いいたします。

RECNA ニューズレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター
第5巻1号 2016年6月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail. recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 株式会社インテックス

©2016長崎大学核兵器廃絶研究センター